

5月14日、23年目を迎えた「母の日に贈るコンサート」を終えてふと考えた。

私たちがこの世に生まれて最初に発する声、それは「産声」だと。それまで胎盤から酸素を得ていた赤ちゃんが、使っていなかった肺を大きく広げて深呼吸し、自発呼吸を始める最初の叫びだ。

音声学によると、赤ちゃんはどこの国でも振動数440～500ヘルツ、「ラ」の近辺の音を発しながら生まれるともいわれる。もし、それが本当なら「産声」は原始から続く歓喜の歌声のようだ。

実は、私の娘の「産声」こそ、この「母の日に贈るコンサート」を誕生させたきっかけだった。娘の誕生によって、私は強い衝撃とともに生命の神秘と尊厳に気付かされ、人の命の尊さと愛の素晴らしさを歌い続けたいと決意した。

そして、今やその娘は保育

## 「産声」は私たちの宝で未来



園に勤め、真剣に小さな生命を守り育てている。帰宅すると倒れこむように眠る日も多く、病院通いも増えた。勤務時間以外にも行事の準備、研修などに追われているが、子供たちの笑顔を思い出すからか、翌日にはまた生き生きと仕事に向かって行く。

時代が変わりつつある。これまで母親や家族が育てるといふ子供の責任を、保育の専門家が担う。

保育士とは「専門的知識および技術をもって、児童の保育および児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」と定義されている。さまざまな理由によ

り、保育園に通う子供たちは家族以外の人たちと過ごす生活時間が長い毎日となる。

しかし、母親や家族に代わって保育士さんが子供たちに献身的に愛情を注ぐことで子供たちの心身は育まれていく。

その価値の大きさをわれわれが真に理解し、彼らを尊重し感謝する存在として認めることで、彼らが伸び伸びと活躍できればと願う。子供たちの「産声」は私たちみんなの宝であり、私たちの未来なのだから。

(さとう・しのぶ＝声楽家)  
—毎月第3金曜日掲載

